

## 鳥をいちばんかっこいい姿に描ける画家、藪内さん

あきやま こうや  
秋山 幸也(相模原市立博物館 学芸員)

鳥を好きになったのは絵がはじまりだった

小学校低学年のころ、家にあった図鑑を引っ張り出して落書帳に模写するのが私の遊びの一つでした。その絵の出来は、残念ながら客観的に見て「才能」を見いだすことはできず、まったくもって平凡なものでした。しかし、落ち着きが無く、1日中うろさく飛び回って遊んでいるような子が、落書き中だけは集中して静かだったからなのでしょう、家族はその絵を盛んに褒めてくれたのです。

そんなわけで大学ノートの落書帳に「鳥シリーズ」が2冊、3冊と続いていたある日、ふと庭を見ると、小鳥が植込みから次々にアオムシをつまんで食べています。

「あ、シジュウカラだ」

落書きに書き添えた種名が深層にあったのでしょうか、誰に教わるでもなく、自然と種名が浮かんだことに驚くと同時に、図鑑の世界が自分の身近なところに実在するという発見に、心躍ったのです。これが、私が野鳥観察を始めたきっかけです。

### 藪内さんとの出会い

そんな小学生にとって、日曜日の朝刊に月1回掲載される、とても待ち遠しい紙面がありました。愛鳥キャンペーン新聞広告(サントリー株式会社と財団法人日本鳥類保護連盟：いずれも当時の名称)です(図1)。この広告は、半面ほどのスペースを使って、ダイナミックな野鳥などの線画に、自然保護を啓発する1,200文字ほどの文章が添えられたものです。図鑑では見たことのない、鳥たちの躍動感あふれる飛翔図や正面顔など、



図1. 愛鳥キャンペーン新聞広告(縮刷版)。

精緻せいせいで美しい線画に、自然保護を啓発する格調高い文章。小学4年生で日本野鳥の会へ入会し、いっばしのバードウォッチャー気取りだった小学生を魅了していたのです。1973年から1981年まで77回に及ぶ広告の作画をすべて担っていたのが、藪内正幸さんでした。

さらに、鳥の絵を飽きずに描いていた息子にと親が買い与えてくれたのか、『別冊アトリエNo.121 鳥の描き方』(内田康夫・藪内正幸, 1976)も手もとにあり、新聞広告と併せて藪内さんの名は私の中で燦然さんぜんと輝く「大師匠」となったのです。

### たった1度の面会

そんな変わり者の小学生(当時は小学生男子がサッカーや野球もせず野鳥観察に夢中なんて、相当珍しかった)も、大学生になります。詳細は省きますが、バードウィークに、あるテレビ番組のアルバイトの話があつて引き受けました。戸隠とがくし(長野県)からの生中継番組で、いくつかの企画の中の一つとして、私を含めたアルバイトの大学生がバードウォッチングをして、出現種を報告するというものがありました。別企画のゲストの一人が藪内さんだったのです。

前夜に戸隠入りし、戸隠神社中社の旅館でゲストのみなさんにご挨拶かたがた、少し歓談のお時間をいただけたこと。たしか10名近くの学生アルバイトの中で、私以外の全員がもう一人のゲストであった写真家の宮崎学さんを取り囲んでいました。1人だけ緊張おもちの面持ちで藪内さんの前に座った私に「君はそっち(宮崎さん)の方じゃなくていいの? 気を遣わなくていいんだよ」などと、優しく声をかけてくれました。藪内さんにお目にかかりたくて来たということをやっとの思いで伝えると、それじゃあと言って、様々なこととお話していただきました。

### 自分が一番見たい姿勢と向きで描く

後からそれがシャイな藪内さんの照れ隠しだったと知のですが、話の半分かそれ以上は冗談だじゅれや駄洒落で、リアク

ションに困ったことを覚えています。そんな中で印象的だった言葉は、「写真をトレースしちゃダメ、写真はレンズの歪みがあるからね。」「双眼鏡を覗きながらスケッチなんてしないねえ。とにかく写真を撮ったりしながら、じっくり観察するんだ。アトリエに戻ってから頭の中で姿勢や形を再構築して描いてるよ。」「どうせ描くなら自分が一番見たい姿勢と向きで描きたいでしょ。」

こちらへ向かって飛び込んでくるように飛ぶ猛禽もうきんるい類や、大海原を滑空する海鳥。実際に観察するのが困難なシーンでも自在に描いてしまうのは、そうした観察に加え、若いころに国立科学博物館でひたすら骨格標本と向き合った経験が生きている。そんなことが『別冊アトリエ』にも書かれていたことを思い出しながら聴いていました。

藪内さんのちょっと異色な作品の一つに、オオタカの飛翔図があります(図2; 藪内正幸美術館所蔵)。下絵から完成までの製作過程を4点の順に追ったこの作品も番組内で紹介されたのですが、この時手に取って見せていただきました。

緊張のあまりすべての会話を思い出せないのですが、絵から湧き出る野生動物への愛情と藪内さんのお人柄が1本の線でつながっているのを実感できたことは、強く印象に残っています。ただ一つ悔やまれるのは、「君の絵も見せてくれればよかったのに」と言われたことです。あまりにも恥ずかしくて、自作の絵を持参しなかったのです。でも、それを見たときの藪内さんの表情を想像するだけで、今も顔から火が出そうになり、お見せしなくてよかったと自分に言い聞かせています。



図2. オオタカ飛翔図(完成図)。